

1

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（出題の都合上、本文を一部改変しました。）

「木を見て森を見ず」という。

「自分らしさ」とか、「個性が大事」とか、現代は、多くの人が「木を見ている時代」だ。主観的思考（インサイダー思考）中心だ。

では、「森を見る」ようにしてみたら、何が見えてくるだろう？

①、高い山を麓^{ふもと}から見れば、ごつごつとした石と土の壁^{かべ}にしか見えない。

けれど、遠くから同じ山を見ると、美しい山容が浮かび上がる。

これが、「森を見る」ことの効用だ。

客観的思考（アウトサイダー思考）である。

このように、客観的思考（アウトサイダー思考）で考えることが、②今の世の中に役立つ。

客観的に考えることができる人は、ものごとを、外側から見ることができる人である。

インサイダーは、情感によって考え、答えを出す。アウトサイダーは、理によって考え、答えを出す。どちらが正しいとは限らない。

けれども、今は、ものごとの選択肢^{せんたくし}が多すぎるし、世の中の価値観が複雑すぎる。

多くの人が、自分の価値観に従って、発言をし、行動することを、多様化などというが、要は、③ということだ。

その状態を、客観的思考をすることで、広い視野から、違^{ちが}う角度から、整理していくことが必要なのではないか。

突き当たっている問題に、思わぬ解決の糸口をもちあすかもしれない。

（中略）

ある生徒が、ちょっとした問題をおこした。学校では保護者を呼んで注意することにした。そんな呼び出しに出ていくのはいやだから、いちばん可愛がっている、おばあさんが出頭することになった。

おばあさんは、はじめから怒っていた。

④「うちの孫にかぎって、悪いことをするはずがない。きっと、悪い友だちに、そのかされたことにちがいません」といったことを繰り返して、一步もひかない。

「その友だちは、何ていうのですか。黙ってはいられない……」

などというばかりで、手がつけられない。

おばあさんは孫をいちばんよく知っていると思っている。そんな悪いことをしたりする子ではない。かりに、したとすれば、悪いのに引きずり込まれてやったこと。その子たちをつかまえて叱ってください、などということをくどくどのべ立てて、学校を困らせた。

おばあさんは、決してウソを言っているのではない。おばあさんの目からすると、孫は実にやさしい子で、気が弱い。強く言われると、否と言えないかもしれない。それで仲間引き入れられ、バレると、ひとり責任を負わされたのだ。そう思い込んでいる。うちうちのこどもである。なんでもわかっていづもりだが、その実、見て見ないところがある。それが一緒にくらししているものの目には入らない。ある先入観があつて、それに合致するものは目に入るが、それから外れるものは、目に入らない。

つまり、可愛いところだけを見ているのである。それでいて、いちばん近くにいるのだから、いちばんよくわかっていると信じている。

第三者である人たちには明々白々のことが、当事者、あるいは当事者にごく近い人には目に入らない。気に入らないところは見ないからであらう。見えないのである。それで当事者と第三者で、見方が大きく異なる。異なるどころか、正反対ということがすくなくない。

言うまでもなく、第三者の見方の方に客観性が高いのだが、当事者の信念はそれを拒むのである。

昔のことわざに、

「知らぬは亭主ばかりなり」

というのがある。もとは、

「町内で知らぬは亭主ばかりなり」

だった、という。

女房が浮気をする。とんでもないことで世間の噂は広まる。⑤、いちばんの関係者である亭主は、いっこうにご存知ない。それを皮肉ったもの。

いちばんかわりあいのあるはずのものが、まるで知らない。それを世間はやく噂にする。

近くにいたために、かえってわからなくなっていることがあるのは、人間の皮肉である。人の言うことは当てにならないというが、⑥ 他人の噂の方が本当であることがすくなくない。

亭主はダメされているのではない。知りたくないことだから、耳に入らないだけのことである。ア

近くことは、案外、遠くのことより見えにくいことがある。人間の目は、遠くを見るには都合よくできているが、自分を見ることができない。

灯台もと暗し、というのも、近いところははなれたところより見えにくいことを言ったことわざである。はなれたところのものを照し出すことのできる灯台が、真下のものには光が届かない。イ

囲碁の対局がある。

それを盤側で観る人がいる。その観戦者がいろいろなことを考える。ときには口に出す。それが、対局者よりもツボにはまり、いい手だったりする。観戦者がうわ手であるわけではない。局外者であるために、対局者の見えないところが見える。⑦。

一目で勝ち負けの決まる囲碁において、八目とはたいへんな強みである。局外者であるためによって、その力をもつことができる。

アウトサイダーであるのは、優位に立つことである。客観的に判断できるからである。

スポーツにおいても、選手がコーチや監督をもつのは、自分だけではわからないところを、見てもらい、教えてもらう必要性を知っているからである。ウ

ひとりだけで練習してはわからないことが、コーチにはわかる。

コーチ自身が名選手だったりする必要はない。むしろ、平凡な選手だった人の方が、すぐれたコーチになる。

名選手がコーチ、監督をすると、どうしても第三者の立場を失いやすい。自分も選手と同じような立場になれば、コーチの力が

なくなる。(E)

⑦のようなアドヴァイスを出すことのできる人をもつことはすばらしいことで、その好運にめぐまれるのはきわめてすくないと言っている。

アウトサイダーとインサイダーがある。

普通、一般に、インサイダーの方が強力であるように考えられるが、つねにそうであるとは限らない。

アウトサイダーの方が強力であることがすくなくない。インサイダーが優勢な社会と、アウトサイダーが有力な社会が共存していることを、われわれは、いまなおはっきりさせていないように思われる。

(A)の思考は点的であるのに対して、(B)思考は、線的で論理的性格がつよい。

アウトサイダー思考が物理的であるとするなら、インサイダー思考は化学的であるといっている。

世界的に見ると、(C)思考、(C)論理が優先しているように見えるが、日本は地理的条件あって、(D)思考が微妙に発達している。

日本文化が情緒的であると言われるのも、(D)思考のつよさによるのである、論理的であるのを冷たく感じるのも同じ原理によるといってよいであろう。

インサイダーは、安定した生活が条件である。社会構造が、内部的にも外部的にも大きく変化している現在において、アウトサイダー思考に注目するのは、むしろ、当然のことである。

インサイダーも強いが、アウトサイダーはさらに強い。

(中略)

軽井沢はおそらく日本一の避暑地であろうが、軽井沢の住人がこしらえたのではない。

東京の暑さにへきえきした、イギリス人たちがつくった名所である。

日本人は、軽井沢のよさを知ることができなかった。外国人に教えられ、そのよさを知り、いまではたいへんな賑わいになって

いる。

上高地は、ウェストンという開発者が伝わっている。毎夏、ウェストン祭が行われる。土地の人々には上高地のよさがわからなかったのである。外国人に見つけてもらうまで、その土地のよさがわからなかった、というのは、いくらおかしいようでもある。それだけアウトサイダーの眼はすぐれている、ということにもなる。

奥入瀬の溪流も、土地の人が見つけた景勝の地ではなかった。東京から訪れた文人、大町桂月が、天下の絶景と賛えたのが広まって、有名になった。

土地の人にはただの溪流、渓谷で、荷物をはこぶのはたいへんであるから、景色をめぐるゆとりなどあるわけがない。⑧ 遊びに来た人は、土地の人がわからなかった美しさを、一目でとらえる。アウトサイダーだからである。

インサイダーでは、アウトサイダーの美をとらえることができないから、人は旅をする。アウトサイダーになるのである。

近年、観光が産業のようになったのは、アウトサイダーの快感を求める人が多くなったためであろう。

住めば都ともいうが、未知の土地へ行けば、ものみなおどろきである。人生が変わったような気がする。ヒマがなければ時間をつくっても、カネがかかっても、疲れても、海外旅行へ行きたいという人間が世界的に急増しているようだ。

各国とも、観光を重視し、財政を支えさせようとしている。その中で日本は、どうしたわけか、アウトサイダー効果に鈍感で、すくなくとも、観光を産業と考えるようなことはいまなおすくない。二〇二〇年のオリンピックに向け、外国人観光客をふやそう、ということを出した。⑨ おくれている。

先年、観光庁という役所ができたとき、日本の魅力^{みりよく}を国際的にPRしようと、世界的に知名度の高いスポーツ選手などの力を借りようとしたことがある。観光ということがわかっていない、情けない話である。

観光客はアウトサイダーとしてやってくるのである。⑩ インサイダーの知名人がPRしたって、しかたがない。アウトサイダーをさがして、その人たちにPRしてもらわなくてはならない。

インサイダー価値とアウトサイダー価値はほとんど関係なく共存するところが、人間のおもしろいところである。

これまでのところ、アウトサイダー・※ヴァリユーは、※ニユース・ヴァリユーにおくられて元気がよくない。ロシア文化がなん

となく活力に欠けるのは、インサイダー価値に目がくらみ、遠くのを発見する能力に問題があるのかもしれない。

⑪、と誤った観念にしばられていては、アウトサイダーとして独立するのは困難であろう。

(外山滋比古『消えるコトバ 消えないコトバ』より)

※ヴァリュ―…ねうち。価値。

※ニュース・ヴァリュ―…ある物事の、それが報道された時に世の中にうけるかどうかを考えたときの価値。

◎解答は句読点や記号等も一字として数えます。

問一

①・⑤にあてはまることばの組み合わせとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. ①つまり ⑤しかしながら

イ. ①もし ⑤だから

ウ. ①さて ⑤ただし

エ. ①たとえば ⑤ところが

問二

——線部②「今の世の中に役立つ」とありますが、役立ち方としてふさわしくないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. ものごとを広い視野から見ることで、世の中の価値観を単純化することができる。

イ. ものごとを広い視野から見ること、様々な人の意見や行動を整理することができる。

ウ. ものごとを違う角度から見ることで、新しい解決策を考え出すことができるかもしれない。

エ. ものごとを違う角度から見ることで、問題を解決するきっかけが見つかるかもしれない。

問三 ③にあてはまることばを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ボロボロ イ. ダラダラ ウ. バラバラ エ. グラグラ

問四 —線部④「うちの孫にかぎって、悪いことをするはずがない。きっと、悪い友だちに、そのかされたことにちがいありません」とありますが、このように思い込んでしまう理由を、本文中のことばを使って三十五字以内で答えなさい。

問五 —線部⑥「他人の噂の方が本当であることがすくなくない」とほぼ同じ内容のことばをこれより前の本文中から十五字でぬき出して最初の五字を答えなさい。

問六 本文には次の一文がぬけています。この一文を入れるのに最もふさわしいところを、本文中の(ア)～(エ)から一つ選び、記号で答えなさい。

その不思議に気づいた人は、アウトサイダー思考を心得ていたのである。

問七 ⑦に共通してあてはまる四字熟語を漢字で答えなさい。

問八 (A)～(D)にあてはまることばの組み合わせとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|----------------|-------------|-------------|------------|
| ア. (A) アウトサイダー | (B) アウトサイダー | (C) アウトサイダー | (D) インサイダー |
| イ. (A) インサイダー | (B) インサイダー | (C) アウトサイダー | (D) インサイダー |
| ウ. (A) アウトサイダー | (B) インサイダー | (C) アウトサイダー | (D) インサイダー |
| エ. (A) インサイダー | (B) アウトサイダー | (C) アウトサイダー | (D) インサイダー |

問九 ――線部⑧「遊びに来た人は、土地の人がわからなかった美しさを、一目でとらえる」とありますが、その具体例は本文中にいくつ書かれていますか。その数を漢数字で答えなさい。

問十 ――線部⑨「おくられている」とありますが、何が、何と比べておくられているのですか。最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 日本の、海外旅行へ行きたいという人間の増加傾向が、世界各国と比べておくられている、ということ。
- イ. 日本の、観光を産業と考えて財政を支えようとする動きが、世界各国と比べておくられている、ということ
- ウ. 日本の、外国人観光客にとっての魅力の発見が、オリンピックの開催時期と比べておくられている、ということ
- エ. 日本の、外国人観光客をふやそうという動きが、オリンピックの開催時期と比べておくられている、ということ

問十一 ――線部⑩「インサイダーの知名人がPRしたって、しかたがない」とありますが、その理由を本文中から三十二字でぬき出して、最初と最後の五字を答えなさい。

問十二 ⑪にあてはまることばを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 外国の真似をすればいい
- イ. 外国の真似などしてはいけない
- ウ. 自分の国の良いところを探そう
- エ. 自分の国の悪いところを正そう

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(出題の都合上、本文を一部改変しました。)

高校一年生の新と十九歳の朔は兄弟である。一昨年前の大晦日に二人で乗った高速バスが事故を起こし、その時頭を強く打ったことが原因で、朔は視力を失った。

その後、朔は盲学校に行くと言いだし、寄宿舎に入ることを希望して家を出た。新は当時所属していた陸上部に退部届を出し、それ以来、陸上競技をやめてしまっている。

一年ぶりに家に帰ってきた朔は、視覚障がい者のマラソン、ブラインドマラソンをやってみたいと言いだし、その伴走者として新を指名する。はじめは断っていた新だが、いったん言い出したら引かない朔に根負けし、伴走者を引き受けることとなる。

ハンバーガーショップの二階から、新はぼんやり外を眺めていた。空は六時を過ぎても昼間のような明るさだけれど、数時間前と比べると、チラシを手にした居酒屋やカラオケ店の客引きが路上に増えた。

「よっ」肩を叩かれて振り返ると、ワイシャツ姿の境野が右手をあげた。

「ずいぶん待たせちゃったね」

「いえ、大丈夫です」

小さく、かぶりを振る新の隣に腰かけようとして、境野は動きを止めた。

「あっちの席に行こうか」

そう言って、四人掛けのテーブル席に移ると「飲みもん買ってくる」と、階段を下りていった。そのうしろ姿に目を見て、新はふっと息を吐いた。

境野を呼び出したのは新だ。昼前、朔を見送ったあと、境野に今日時間をとってもらえないかと電話をした。六時過ぎならと言われて、新は半日ほど時間をつぶした。

階段から革靴の音が聞こえて、境野がトレイを持って上がってきた。

「アイスコーヒーでよかったかな」と、新の前にプラカップを置いた。

「あ、すみません、払います」

リュックに手をやると「いいよこのくらい」と笑って、境野はガムシロップをふたつ入れた。

「甘党あまとうなんですね」

「ん？ 疲れたときって糖分欲しくなるだろ」

「すみません、忙しいのに」

「いや、うそうそ。こういうのは甘いもん食うときの口実。好きなんだよね、わりと甘いもの」

そうなんですか、と新は視線をさげたまま頷うなずいた。

「で、どうしたの？」

境野がストローに口をつけるのを上目遣うわめづかいで見ながら、新は顔をあげた。

「代わりを、探してほしいんです。伴走者の」

「甘いな」

境野は眉間みけんにしわを寄せてストローから口を離はなした。

「……^①すみません、でもオレ」

「あ、いやこれ、アイスコーヒー。ガムシロ二個はやっぱり多かったわ」

そう言って境野は紙ナプキンで口を拭ぬぐった。

「理由を聞かせてもらっていいかな」

「それはべつに」

新が口をつぐむと境野は苦笑した。

「べつにってことはないよな。まあそう言うと思ったけど」

もう一度ストローに口をつけて、口元をゆがめた。

「べつにって程度のことなら、こんなこと言ってこないだろ。理由を言いたくないなら、言いたくないって言いなよ」

「言いたくないです」

新が言うと、境野はくっとなつた。

「案外素直だね」

むっとして顔をあげると境野と目が合った。^②この視線をそらしてはダメだ、わかっているのに目が泳いだ。

「言いたくなくても、言わなきゃならないこともあると思うけど。朔君は、このこと知らないんだろ」

※しゅう
首肯すると境野は大きく息をついた。

「^③納得しないと思うよ」

「わかってます」

「わかってて、僕に代わりを探してくれて頼みに来たわけだ」

「はい」

「それなら、理由を話してもらわないとなんとも答えようがないよ。そもそも僕は朔君から最初に相談されているわけだし、専属の伴走者なんてそう都合よく見つかるもんじゃないしね」

そんなことは、新にもわかっていた。自分が勝手なことを頼んでいることも、境野に迷惑をかけることも充分わかっている。それでも、これしか思いつかなかった。

階段からにぎやかな笑い声を響かせながら女の子たちが入ってきた。奥のテーブルでは母親が「早くしてちょうだい」と子どもたちをせかしながらトレーを片付け、その手前の席では制服姿の男女がイヤフォンを片方ずつ耳に当てながらポテトをかじっている。

新はポケットの上から一度ぎゅっとなロープを握った。

「^④……怖いんです」

「怖い？」

境野が虚を突かれたような声で返すと、新は黙って頷いた。

「走ることが？」

「いえ」

じゃあ、と境野はどこか心配そうな表情で新の顔をのぞきこんだ。

「今日、練習中に転倒てんとうさせたんです」

「朔君、ケガしたの？」

「膝ひざをすりむいただけです」と答えると、境野はほっとしたように頷いた。

「あっ、怖こわくなったって、朔君がってことか。転倒てんとうすると恐怖心きょうふしんが出るのはわかるよ。でもそういう経験けいけんも含めて」
新はかぶりを振った。

「朔は、そのあとも走ろうって言ってたくらいで、たぶん、恐怖心きょうふしんとかないと思います」

「じゃあ」

「オレです」

小さくあえぐように息をすると新は顔をあげた。

「オレが怖こわいんです。……もう朔を傷つけたくない」

「もうって？」

「⑤ 朔の目、オレのせいなんです」

えっ、と境野は数度まばたきをしてわずかにからだを寄せた。

「バスの事故だったんだろ」

「あのバスに乗ることになったのは、オレのせいだから」

境野は安堵あんどしたように息をついた。

「それは新君のせいとは言わないよ。あの事故のことは僕も知ってる。同じバスに乗っていても、軽傷だった人もいれば、亡くなっ
た人もいた」

「でも、あの日に予定を変えていなかったら、事故にあうこともなかった」

新がそのことを口にしたのは初めてだった。

これまで何度も何度も同じことを考え、悔くやみ後悔こうかいし、そのたびに、でもと言い訳をして自分を擁護ようごし、そんな自分を新は嫌悪けんお
してきた。

もう二度と、朔を巻き込むようなことはしない。兄を傷つけることだけはしないと誓った。なのに今日もまた……。すり傷だと朔は笑ったけれど、程度の問題ではない。

伴走を始めたのは朔のためだ。朔に頼まれたから、朔が望んだから、朔が求めたから。でも、いつしか新は、走ることを楽しむようになっていた。そんな自分の思いを否定し、ブレーキをかけてきた。あってはならないことだからだ。

なのに今日、あの瞬間、夢中になっていた。

⑥ あのと自分とは、伴走者ではなかった――。

「朔君は自分の目のことを新君のせいだなんて思っていないよ」

「わかってます」

そんなことは新にもわかる。兄がそういう人間でないことも知っている。

⑦ だったら

「朔は、強いから」

こうべを垂れ、新は膝の上でこぶしを強く握った。

「そうかな」

⑧ と言った境野の顔を、新は驚いたように見つめた。

「彼は、そんなに強い人間じゃないと思うけど」

「そんなことっ」

「弱いから、強くなろうとするんじゃないの？」

境野はプラカップの表面についている水滴を指で拭いながら、イスの背にからだを預けた。

「朔君、盲学校に入った当初は完全に人と関わることを絶っちゃってね。学校でも寄宿舎でも誰とも口をきかなくて、寄宿舎では四人部屋だったんだけど、いつも部屋の隅で膝を抱えて顔をふせているような具合で。心理的な引きこもりっていうのかな。そんな具合だったらしいよ」

新は目を見開いた。

そんなはずはない。朔は失明したとわかったとき、家族の誰よりも冷静だった。悲嘆^{ひたん}して泣く母親や失明を認めず別の病院を探しまわる父親に、大丈夫だからと頷き、盲学校へ行きたいと言った。

「朔君、盲学校に入ってから今年の春まで、家に帰ってないだろ」

⑨と頷くと、境野はゆっくりまばたきをした。

「寄宿舎っていうのは、自宅から通うことが困難な場合に利用するところで、利用者はけっこういるんだ。でも週末は全員自宅に帰る。で、また週の初めに寄宿舎^{もど}に戻って生活をする」

知らなかった。そんなことは母親からも誰からも聞かされていない。

「でも朔は」

「週末や長期の休みになると、おじいさんだか誰かの知り合いが住職をしている寺で世話になっていたって」

「寺？」

「詳しいことはわからないけど、その寺はいろんな事情のある人を受け入れているらしくてね。家に帰りたくないっていう朔君のことを、ご両親が相談されて、引き受けてもらっていたらしい」

「なんで……」

そこまでして家に戻らなかった兄のことが、新には理解できなかった。

⑩「そこが彼の弱さ。で、強さ」

「……………」

「見えていたものが突然見えなくなるって、相当な恐怖だと思う。[※]晴眼者の僕がその怖さをわかるなんてことは絶対に言えないんだけど」

新は黙って頷いた。

手も足も自由に動く。からだは健康なのに、目が見えないというだけであたりまえにできていたことができなくなる。自分で服を選んで着替^きえることも、ひとりで出かけることも、自販機^{じはんき}で飲みたいものを買うことも、どれひとつ容易ではない。いまの朔を見ていても、わかる。

「そういう姿を見られたくないっていうのと、見せたくないっていうのが彼にはあったんじゃないかな。家族や親しい人にはとくに」

家族を悲しませたくないから、大切な人を苦しませたくないから、そういう姿を見せたくないから、悲観されたくないから、可哀そうだと思われたくないから……。新は唇を強く噛んだ。朔なら、そう思うかもしれない。

⑪ 彼が変わったのは夏休みのあとだよ。なにがあったのかは朔君も言わないし、先生たちも聞かなかったようだけど。つきものが落ちたみたいに、歩行訓練なんかの自立活動も勉強も積極的に取り組むようになったって。僕は月に二度くらいしか行ってないけど、九月に朔君を見たときは正直驚いた。声を聞いたのも初めてだったしね」

境野の口から語られる朔は、どれも新の知らない姿ばかりだった。夏の間になにがあったんだろう。なにが朔を変えたんだろう。

新は浅く息をした。

「そんなに変わるもんかな」

「変わると思うよ、僕は」

そうだろうか、と新は首を傾げた。少なくとも、自分はなににも変わっていない。

「新君だって変わったよ」

えっ、とかぶりをあげると、境野は微笑んだ。

「人って変わるんだよ。よくも悪くもね。でも、変わってしまうのと、変わろうとするのは違う」

「変わろうとする……」

境野はテーブルに肘をついて手を組んだ。

「彼がどうして変わったのか、いつか聞いてみたいと思うんだけど、朔君はずっと変わろうとしてるんだと思う。いまも素直に新は頷いた。

「君は？ 新君はどう？」

(いとうみく『朔と新』より)

※境野：朔が通う盲学校の先生の伴走者であり、陸上部のコーチ。朔から、新を伴走者にしてブラインドマラソンをやってみたいと相談され、それ以降、様々なアドバイスをしている。

※かぶりを振る：頭を左右にふる。否定を意味する。

※首肯する：うなづく。

※晴眼者：視覚に障害がない人。

※ロープ：ブラインドマラソンでは、走者と伴走者が同じ一本のロープを輪にしたものを、それぞれにぎって走る。

◎解答は句読点や記号等も一字として数えます。

問一 ――線部①『すみません、でもオレ』とありますが、新はどのようなことについて「すみません」と言っていますか。最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分が呼び出したのに、境野に飲み物をおごってもらったこと。

イ. 忙しくて疲れている境野を、自分の用事で呼び出したこと。

ウ. 自分の身勝手な都合で、境野に頼み事をしていること。

エ. 境野に理由を聞かせてほしいと言われたが、そのつもりがないこと。

問二 ―線部②「この視線をそらしてはダメだ、わかっているのに、目が泳いだ」とありますが、この時の新の心情として最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 真剣に考えたうえでの決断であることを相手に伝えようとしてみたものの、その決断によって今後引き起こされる事態への不安でいっぱいになっている。

イ. その場しのぎの判断であることを見ぬかれないようにしようとしているが、その考えを見すかされているような気がして内心おびえている。

ウ. 真面目に話を聞いてくれないことに抗議の気持ちを見せたのが、一方で自分の考えが正しいという自信も持てないでいる。

エ. 自分の意志は固く、何があっても変わらないということを相手に見せたいのだが、一方でそれをうしろめたく思う気持ちを隠しきれないでいる。

問三 ―線部③「納得しないと思うよ」とありますが、

1. 境野は、誰が「納得しない」と言っていますか。最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 新 イ. 朔 ウ. 代わりの伴走者 エ. 専属の伴走者

2. 境野は、どのようなことについて「納得しない」と言っていますか。本文中のことばを使って十字前後で答えなさい。

問四 ―線部④「……怖いんです」とありますが、これは誰がどのようなことを「怖い」と感じているのですか。最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 朔が、走っているときに転倒してケガをするのを「怖い」と感じている。

イ. 新が、朔と一緒に走って自分もケガをするのを「怖い」と感じている。

ウ. 新が、朔に再びケガを負わせてしまうことを「怖い」と感じている。

エ. 朔が、新の経験不足が原因で転倒させられることを「怖い」と感じている。

問五 — 線部⑥「あのとき自分は、伴走者ではなかった——」とありますが、これは新がどのようになっていたということですか。本文中のことはを使って十五字以内で答えなさい。

問六 — 線部⑦「だったら」のあとに続くと思われることばとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 自分のせいだと思いいいんじやないか？
- イ. 朔君の希望をかなえてあげなくちゃいけないだろう？
- ウ. 朔君が自分をうらんでいるなんて思っちゃいけないだろう？
- エ. 自分勝手なことばかり言ったらいけないんじゃないか？

問七 — ⑧・⑨にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ⑧ぼろり ⑨がくん
- イ. ⑧ぼつり ⑨がくり
- ウ. ⑧ぼとり ⑨こくん
- エ. ⑧ぼそり ⑨こくり

問八 — 線部⑩「そこが彼の弱さ。で、強さ」とありますが、新は、朔が家に戻らなかった理由は「彼の弱さ」と「強さ」からきていると考え出します。その「彼の弱さ」と「強さ」について具体的に書かれている一文を、本文中からぬき出して最初の五字を答えなさい。

問九 — 線部⑪「彼が変わったのは夏休みのあとだよ」とありますが、どのようななったのですか。本文中から三字でぬきだして答えなさい。

問十 本文の特徴を説明したものととして最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. たとえを用いた心情表現によって、読者が登場人物の考えに共感しやすい。

イ. 登場人物の考えが細かく表現されているため、話の筋道を論理的に追いやすい。

ウ. 会話文が中心となっているため、登場人物の性格や特徴がつかみやすい。

エ. 登場人物が見ている風景の表現によって、会話文以外からも心情が読み取りやすい。

問十一 あなたは、中学生になったら変わろうとしていることはありませんか。

あれば、どのように変わろうとしていますか。その理由とともに六十字以上七十字以内で説明しなさい。
なければ、なぜ変わろうとしないのですか、その理由を六十字以上七十字以内で説明しなさい。

3

次の①～⑤の――線部の漢字は、その読みをひらがなで書きなさい。また、⑥～⑩の――線部のカタカナを漢字に直し、必要であれば送りがなも書きなさい。

- ① ライバルを退ける。
- ② 政敵とあらそう。
- ③ 詩を集めて冊子にする。
- ④ 路地をさけて通る。
- ⑤ 丁重に断る。
- ⑥ 優先席をアケル。
- ⑦ セータをアム。
- ⑧ 将来のためにケンブンを広げる。
- ⑨ コウゴウ陛下にお会いする。
- ⑩ 正しいシセイで座る。

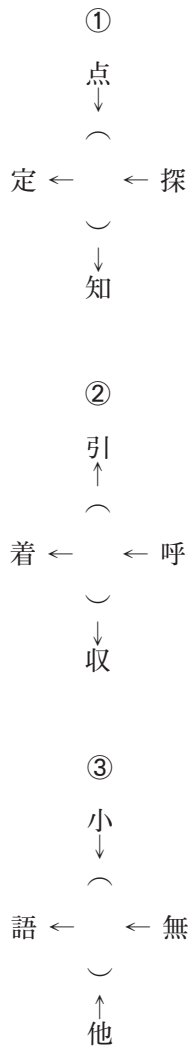
4 次の問いにそれぞれ答えなさい。

問一 次の①～③の類義語を後の語群からそれぞれ一つずつ選び、漢字に直して答えなさい。

- ①不満 ②命令 ③返事

けってい	しゅうち	さんせい
どうい	ぎもん	ふふく
		かいとう

問二 次の①～③について矢印の方向に読むと二字熟語が完成するように、() にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。



問三 次の①～④について、後の意味のことばになるように、あてはまるひらがなを補い完成させて答えなさい。

① お□□り

意味…人柄や態度が、ゆったりしておおやかなさま

② も□□い

意味…思うようにならず、じれったいこと

③ う□□□ん

意味…うまくいった喜びに夢中になっていること

④ い□□□い

意味…しゃくにさわってたまらないこと

〈問題はこれで終わりです〉

氏名	
----	--

[illegible][illegible]

⑥	①
	ける
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤

4

三		二	一
③	①	①	①
う	お		
	り	②	②
	②		
	も		
ん			
④			
い		③	③
	い		
い			